

2 当省のアンケート調査の結果

(要旨)

本政策評価では、国民の食生活の状況、食育に関する意識等を把握するため、アンケート調査を実施した。このうち、第2次基本計画の目標に関連する設問への回答結果は、以下のとおりである。

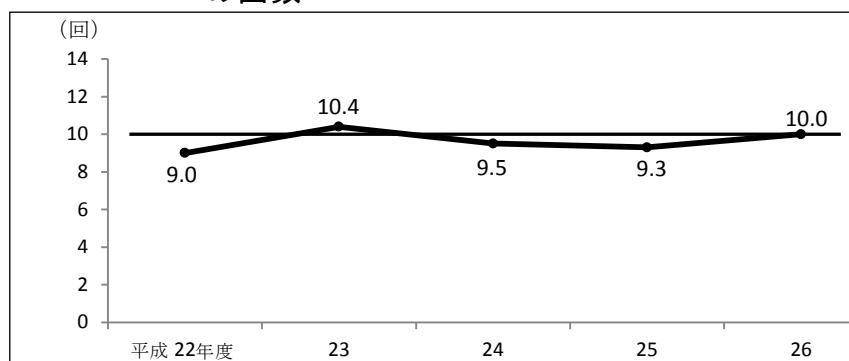
- ① 「家族との食事」、「朝食を食べること」、「栄養バランスに配慮した食生活」、「内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防」、「食事の食べ方」、「農林漁業体験」及び「食品の安全性に関する知識」について、望ましい食生活を送っている人や食育に関する意識の高い人の割合は、第2次基本計画の目標の達成状況とおおむね同じ結果となった。
- ② 一方、望ましい食生活を送っていない人や食育に関する意識の高くない人に、その理由を聞いたところ、「時間がない」、「必要性を感じない」、「面倒」、「これまでに習慣がない」といった回答が多く、望ましい食生活や食育に関する意識を妨げるものとして、労働時間の長さや食生活を重視しない人の存在が背景にあることが示唆された。

(1) 家族との食事

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数（目標値は週10回以上）は、図表2-(1)-①のとおり、平成26年度に週10.0回となっている。

図表2-(1)-① 朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数



(注) 1 測定値は、「食育に関する意識調査」(内閣府)による。

2 回数は、「ほとんど毎日」を週7回、「週に4~5日」を週4.5回、「週に2~3日」を週2.5回、「週に1回程度」を週1回とし、朝食、夕食ごとに該当人数を掛け、合計したものを全体で割り、朝食と夕食の回数を足して週当たりの回数として集計している。

イ アンケート調査結果

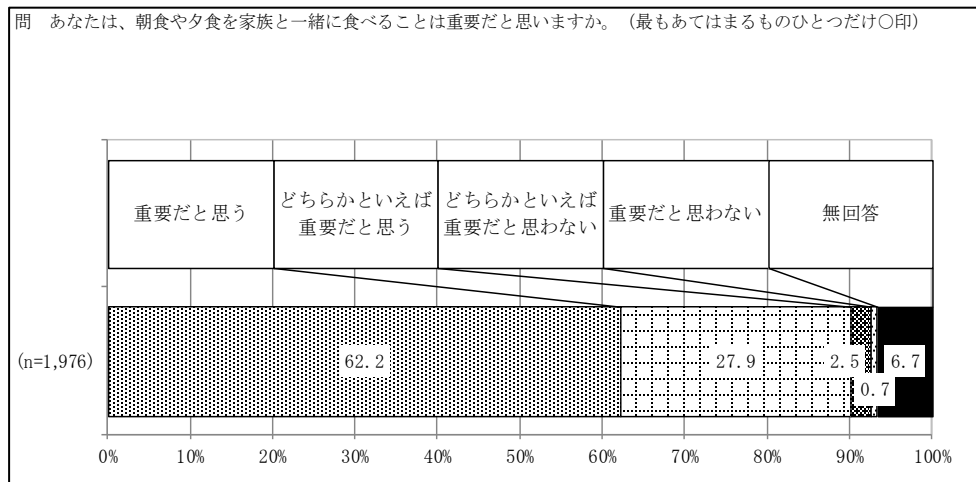
当省のアンケート調査結果では、朝食や夕食を家族と一緒に食べることについて、9割以上の人がある重要性を認識しているものの（図表2-(1)-

②参照)、実際に週10回以上それを実現できている人は半数となっている(図表2-(1)-③参照)。

朝食や夕食を家族と一緒に食べることができない理由(複数回答)については、「自分又は家族の仕事が忙しく時間が合わないから」という回答が8割近くを占めており(図表2-(1)-④参照)、労働時間が長くなるほど朝食を食べない傾向にあるという先行調査(「食育の現状と意識に関する調査」(平成21年12月内閣府))を踏まえれば、労働時間の長さが背景にあることがうかがえる。

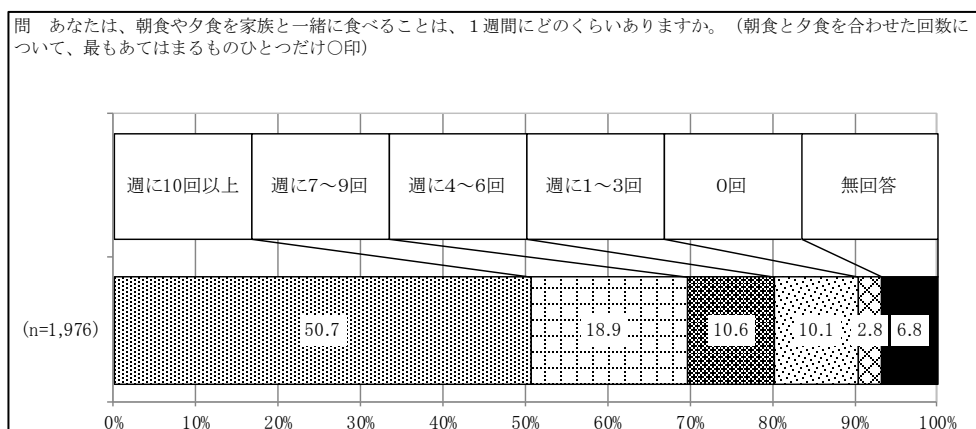
また、調査した27都道府県の都道府県食育推進計画のうち、14県の計画では、この目標が設定されておらず、その理由として、共働き家庭の事情を考慮する必要があること、実効性のある対策を準備できていないことを挙げている県もみられる(前述第3の1の(2)参照)。

図表2-(1)-② 共食の重要性の認識度



(注) 当省のアンケート調査結果による。

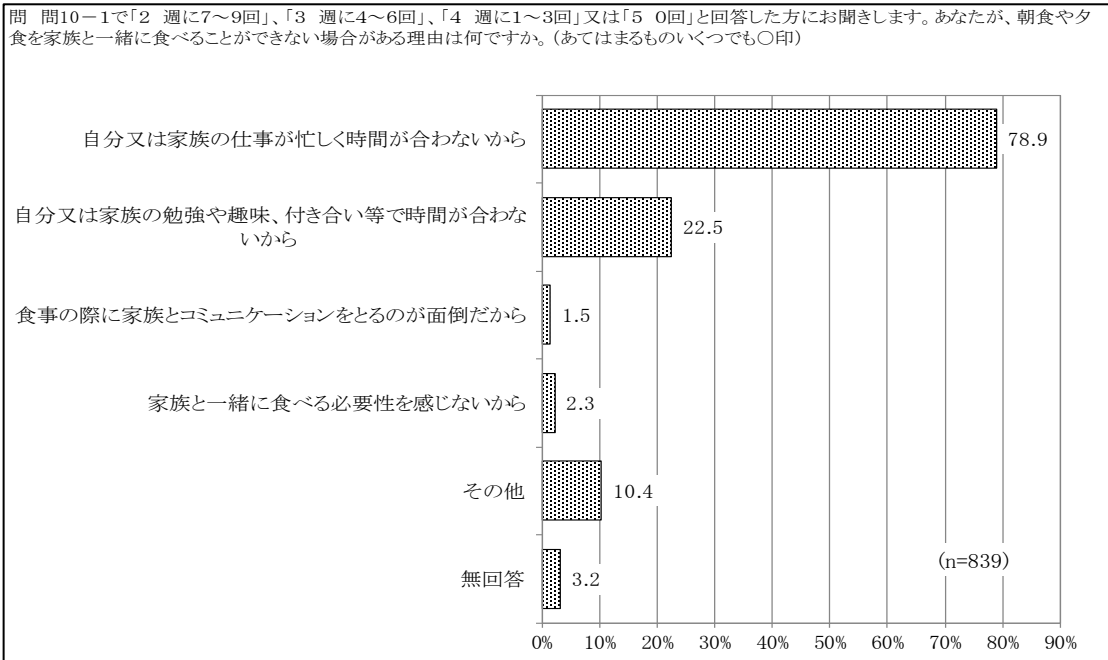
図表2-(1)-③ 共食の回数



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。

2 割合は、四捨五入したため合計が100にならない。

図表2-(1)-④ 共食できない理由



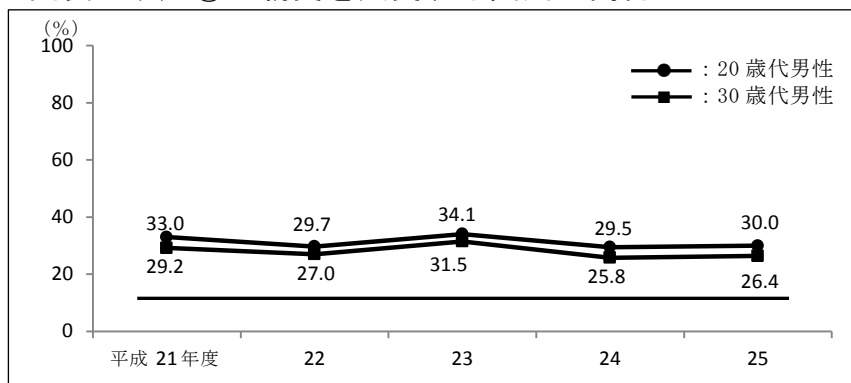
(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

(2) 朝食を食べること

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである朝食を欠食する国民（20歳代及び30歳代の男性）の割合（目標値は15%以下）は、図表2-(2)-①のとおり、平成25年度に20歳代男性で30.0%、30歳代男性で26.4%となっており、目標値の15%に達していない状況となっている（「朝食を欠食する子どもの割合」については、第3の1の(1)参照）。

図表2-(2)-① 朝食を欠食する国民の割合



(注) 1 測定値は、「国民健康・栄養調査」(厚生労働省)による。
2 測定値は、「菓子、果物、乳製品、嗜好飲料などの食品のみを食べた場合」、「錠剤などによる栄養素の補給、栄養ドリンクのみの場合」、「食事をしなかった場合」のいずれかに該当した者の割合である。

イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、朝食を食べることの重要性を、20歳代及び30歳代男性のいずれも9割以上の人認識しているものの（図表2-(2)-②参照）、朝食をほとんど食べない人の割合は、20歳代男性で24.6%、30歳代男性で31.4%となっており、厚生労働省の調査とほぼ同様の結果となっている（図表2-(2)-③参照）。

朝食をほとんど食べない理由（複数回答）については、「食べる時間がない」と「作る時間がない」という回答が、20歳代男性でそれぞれ52.9%と35.3%、30歳代男性でそれぞれ64.9%と24.3%となっており（図表2-(2)-④参照）、労働時間が長くなるほど朝食を食べない傾向にあるという先行調査（「食育の現状と意識に関する調査」（平成21年12月内閣府））を踏まえれば、労働時間の長さが背景にあることがうかがえる。

図表2-(2)-② 朝食を食べることの重要性の認識度

（単位：％、人）

年齢性別	問1-3	1 重要だと思う	2 どちらかといえば重要だと思う	3 どちらかといえば重要だと思わない	4 重要だと思わない	無回答	総数	
							回答者数	割合
男性	20～29歳	63.8%	27.5%	7.2%	1.4%	0.0%	69	100%
	30～39歳	68.6%	22.9%	5.1%	2.5%	0.8%	118	100%
	40～49歳	71.1%	21.4%	4.4%	1.3%	1.9%	159	100%
	50～59歳	73.7%	20.6%	4.0%	1.1%	0.6%	175	100%
	60～69歳	80.0%	13.5%	3.0%	2.6%	0.9%	230	100%
	70歳以上	89.7%	9.9%	0.0%	0.0%	0.5%	213	100%
	男性計	76.9%	17.4%	3.3%	1.4%	0.9%	969	100%

- （注）1 当省のアンケート調査結果による。
 2 割合は、四捨五入したため合計が100にならない場合がある。
 3 回答者数合計には、年齢（歳代）無回答者を含めた。

図表2-(2)-③ 朝食の摂取状況

（単位：％、人）

年齢性別	問1-1	1 ほとんど毎日食べる	2 1週間に2～5日食べないことがある	3 ほとんど食べない	無回答	総数	
						回答者数	割合
男性	20～29歳	62.3%	13.0%	24.6%	0.0%	69	100%
	30～39歳	56.8%	11.0%	31.4%	0.8%	118	100%
	40～49歳	74.2%	11.3%	13.2%	1.3%	159	100%
	50～59歳	81.7%	7.4%	10.3%	0.6%	175	100%
	60～69歳	87.8%	6.1%	6.1%	0.0%	230	100%
	70歳以上	95.3%	3.3%	1.4%	0.0%	213	100%
	男性計	80.5%	7.6%	11.5%	0.4%	969	100%

- （注）1 当省のアンケート調査結果による。
 2 朝食を食べるとは、エネルギー源となる食べ物、飲み物を飲食した場合をいい、砂糖・ミルクを加えないお茶類（日本茶、コーヒー、紅茶など）、水及び錠剤・カプセル・課粒状のビタミン・ミネラルしか摂らない場合は朝食を食べるには含めていない。
 3 割合は、四捨五入したため合計が100にならない場合がある。
 4 回答者数合計には、年齢（歳代）無回答者を含めた。

図表2-(2)-④ 朝食をほとんど食べない理由（複数回答）

（単位：％、人）

年齢性別	問1-2	1 食べる 時間がないから	2 作る時 間が無い から	3 用意さ れていな いから	4 食欲 がないか ら	5 食べな い方が調 子がよい から	6 食べる 必要性を 感じない から	7 その他	無回答	問1-1で3	
										回答者数	割合
男性	20～29歳	52.9%	35.3%	11.8%	41.2%	11.8%	11.8%	5.9%	0.0%	17	100%
	30～39歳	64.9%	24.3%	16.2%	24.3%	8.1%	13.5%	10.8%	0.0%	37	100%
	40～49歳	66.7%	19.0%	28.6%	33.3%	9.5%	23.8%	9.5%	0.0%	21	100%
	50～59歳	27.8%	11.1%	11.1%	27.8%	16.7%	11.1%	16.7%	0.0%	18	100%
	60～69歳	14.3%	7.1%	14.3%	21.4%	35.7%	21.4%	21.4%	0.0%	14	100%
	70歳以上	0.0%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%	33.3%	33.3%	0.0%	3	100%
男性計		49.1%	20.0%	16.4%	29.1%	13.6%	16.4%	12.7%	0.0%	110	100%

（注）1 当省のアンケート調査結果による。

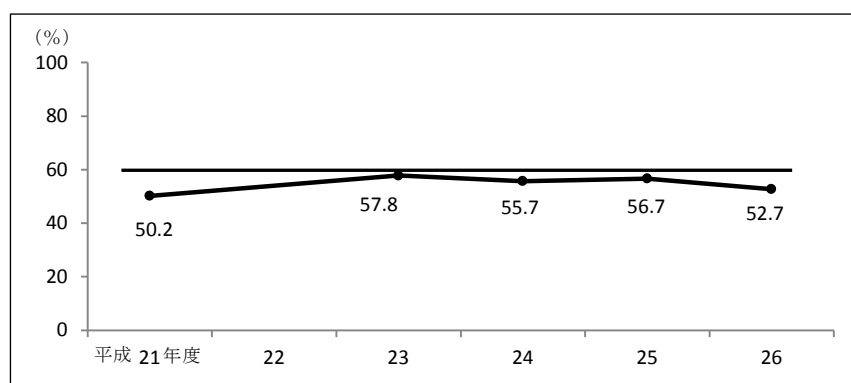
2 割合は、四捨五入したため合計が100にならない。

(3) 栄養バランスに配慮した食生活

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである栄養バランス等に配慮した食生活を送っている国民の割合（目標値は60%以上）は、図表2-(3)-①のとおり、平成26年度に52.7%となっている。

図表2-(3)-① 栄養バランス等に配慮した食生活を送っている国民の割合



（注）1 測定値は、「食育に関する意識調査」（内閣府）による。

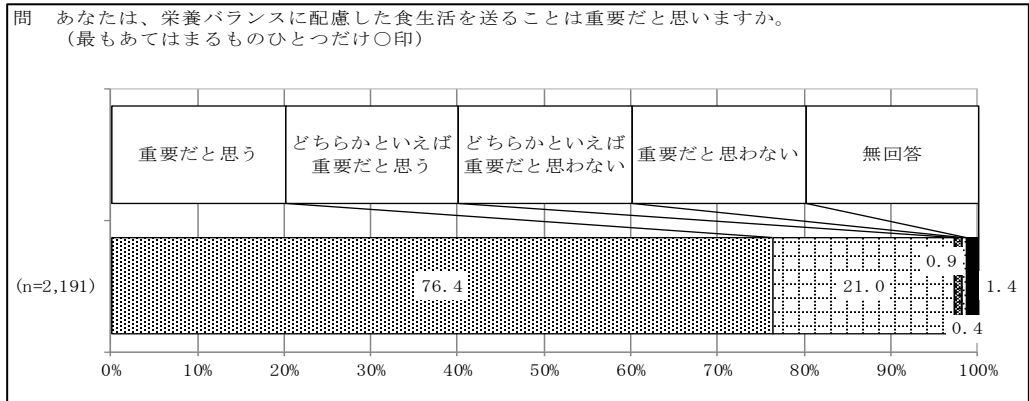
2 測定値は、日頃の健全な食生活を実践するため、食事バランスガイド、食生活指針、日本人の食事摂取基準、6つの基礎食品、3色分類、その他の指針等を参考にしている人の割合である。

イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、栄養バランスに配慮した食生活を送ることの重要性については、9割以上の人認識しており（図表2-(3)-②参照）、栄養バランスに配慮した食生活を「送っている」と「どちらかといえば送っている」という回答を合わせると80.9%となっている（図表2-(3)-③参照）。

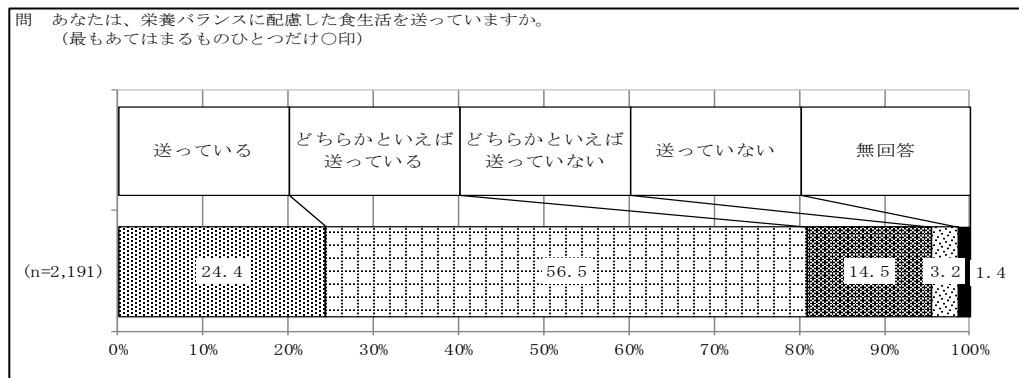
栄養バランスに配慮した食生活を送っていない理由（複数回答）については、「栄養バランスのよい食事を作る時間がない」（34.6%）という回答が最も多くなっている（図表2-(3)-④参照）。

図表2-(3)-② 栄養バランスに配慮した食生活の重要性の認識度



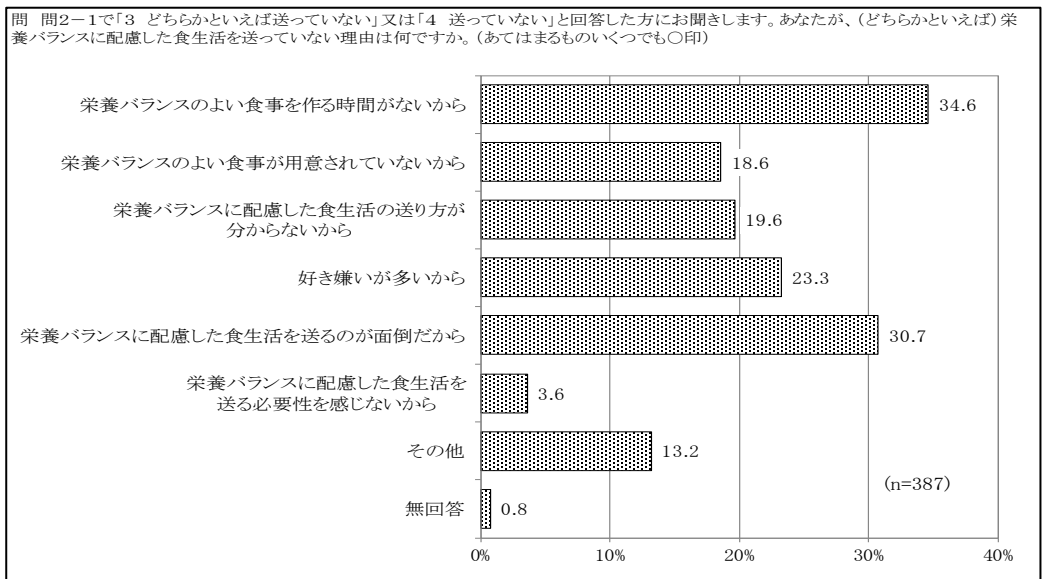
(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 割合は、四捨五入したため合計が 100 にならない。

図表2-(3)-③ 栄養バランスに配慮した食生活の実践状況



(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(3)-④ 栄養バランスに配慮した食生活を送っていない理由



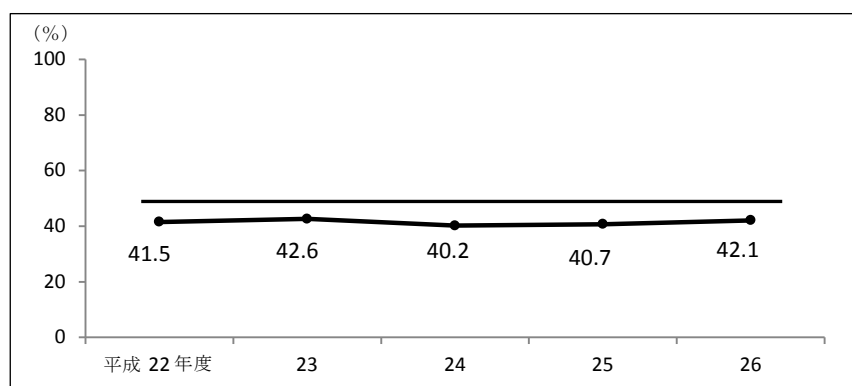
(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は 100 にならない。

(4) 内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防や改善のための適切な食事、運動等を継続的に実践している国民の割合（目標値は50%以上）は、図表2-(4)-①のとおり、平成26年度に42.1%となっている。

図表2-(4)-① 内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防や改善のための適切な食事、運動等を継続的に実践している国民の割合



(注) 1 測定値は、「食育に関する意識調査」（内閣府）による。
2 測定値は、適切な食事、定期的な運動、週に複数回の体重測定のいずれかを実践して半年以上継続している者の割合である。

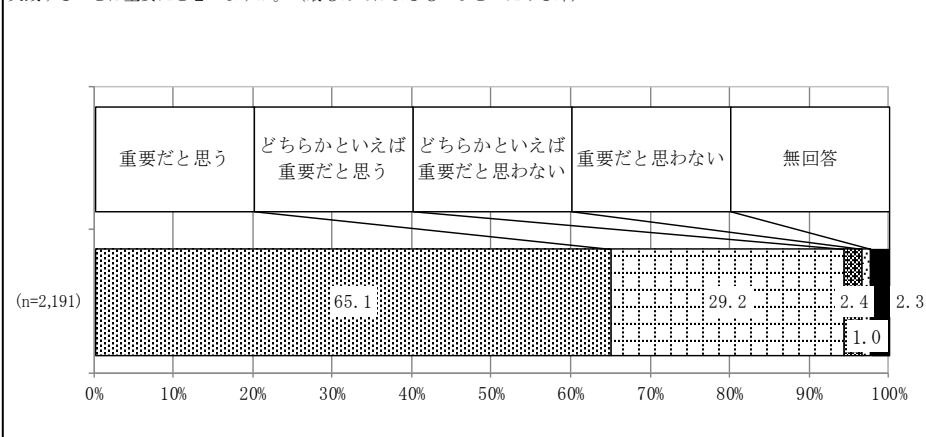
イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防や改善のための「適切な食事」、「定期的な運動」、「週に複数回の体重計測」を実践することの重要性については、9割以上の人認識しているものの（図表2-(4)-②参照）、それを半年以上継続して実践している人の割合は、43.8%となっており、内閣府の調査とほぼ同様の結果となっている（図表2-(4)-③参照）。

適切な食事、定期的な運動、週に複数回の体重計測を実践していない理由（複数回答）については、「必要性を感じない」、「時間がない」、「面倒だから」という回答が上位を占めている（図表2-(4)-④から図表2-(4)-⑥参照）。

図表2-(4)-② メタボリックシンドロームの予防や改善のための食事・運動・体重計測実践の重要性の認識度

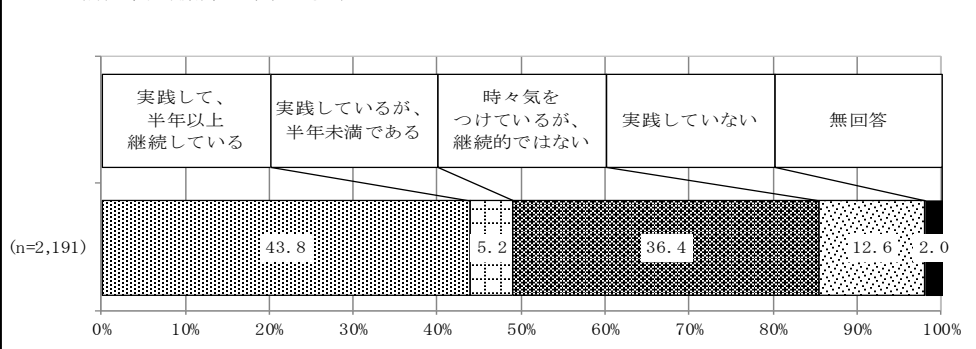
問 あなたは、メタボの予防や改善のために、i) 適切な食事、ii) 定期的な運動、iii) 週に複数回の体重計測のどれかを実践することは重要だと思いますか。(最もあてはまるものひとつだけ○印)



(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(4)-③ メタボリックシンドロームの予防や改善のための食事・運動・体重計測の実践状況

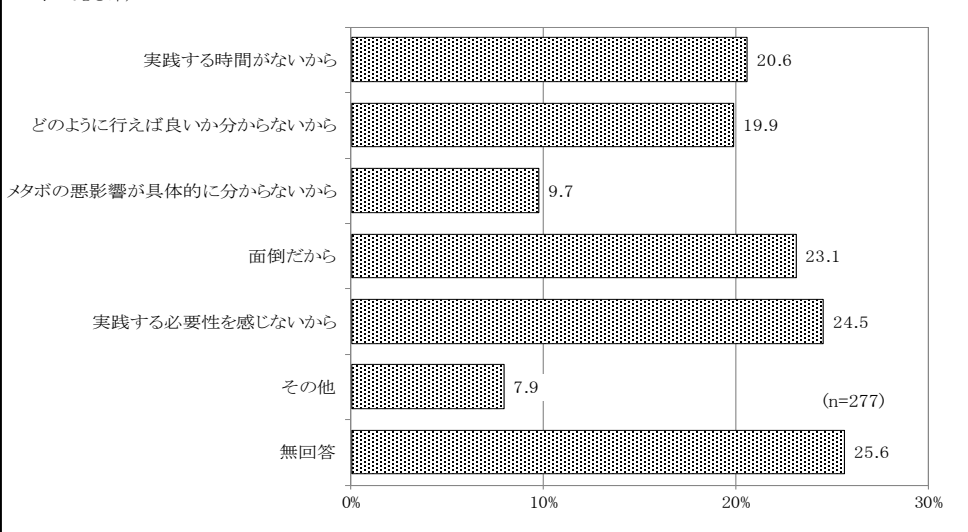
問 あなたは、メタボの予防や改善のために、「i) 適切な食事」、「ii) 定期的な運動」、「iii) 週に複数回の体重計測」のどれかを実践していますか(最もあてはまるものひとつだけ○印。i)～iii)について重複して実践している場合は、実践期間が一番長いもの)



(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(4)-④ 「適切な食事」を実践していない理由

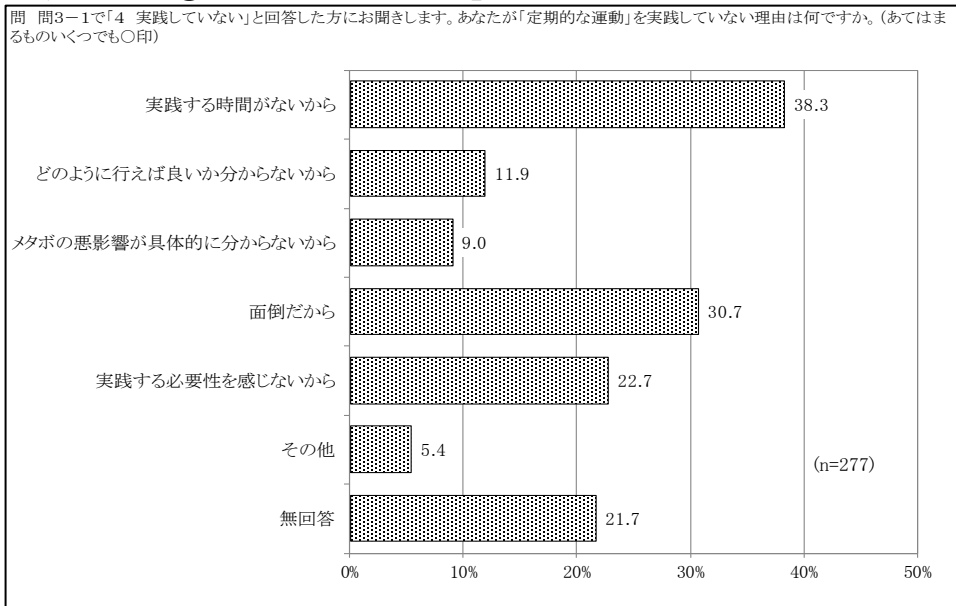
問 問3-1で「4 実践していない」と回答した方にお聞きします。あなたが「適切な食事」を実践していない理由は何ですか。(あてはまるものいくつでも○印)



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。

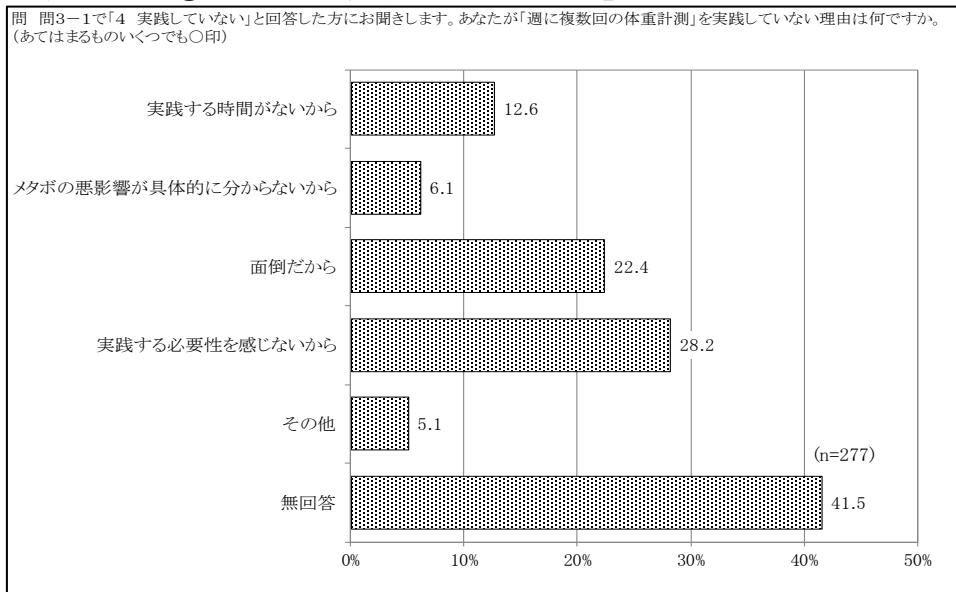
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

図表2-(4)-⑤ 「定期的な運動」を実践していない理由



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

図表2-(4)-⑥ 「週に複数回の体重計測」を実践していない理由



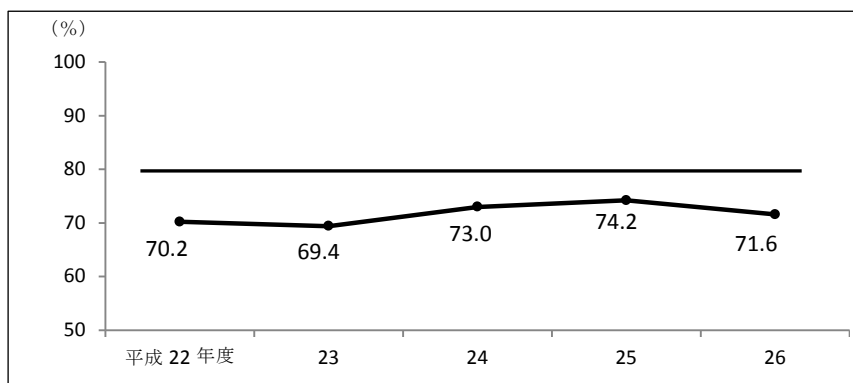
(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

(5) 食事の食べ方

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つであるよく噛んで味わって食べるなどの食べ方に関心のある国民の割合(目標値は80%以上)は、図表2-(5)-①のとおり、平成26年度に71.6%となっている。

図表 2-(5)-① よく噛んで味わって食べるなどの食べ方に関心のある国民の割合



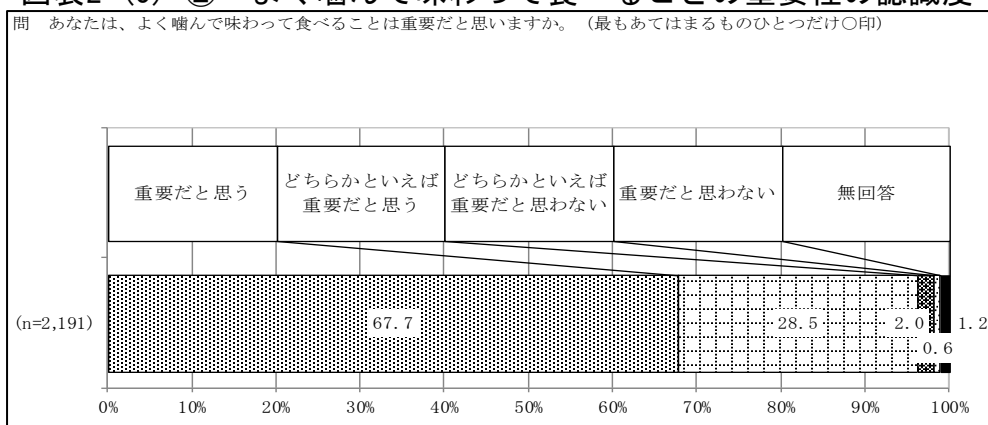
(注) 1 測定値は、「食育に関する意識調査」(内閣府)による。
 2 測定値は、食べ方について、「関心がある」又は「どちらかといえば関心がある」と回答した者の合計である。

イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、よく噛んで味わって食べることの重要性については、9割以上の人々が認識している(図表2-(5)-②参照)。また、実際に「そうしている」及び「どちらかといえばそうしている」という回答を合わせると70.9%となっている(図表2-(5)-③参照)。

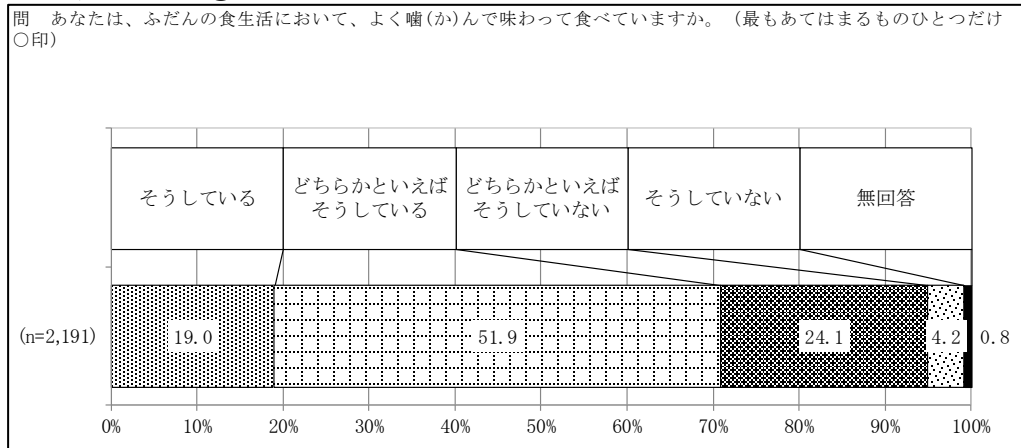
よく噛んで味わって食べていない理由(複数回答)については、その「習慣がないから」(49.0%)という回答が最も多くなっている(図表2-(5)-④参照)。

図表2-(5)-② よく噛んで味わって食べることの重要性の認識度



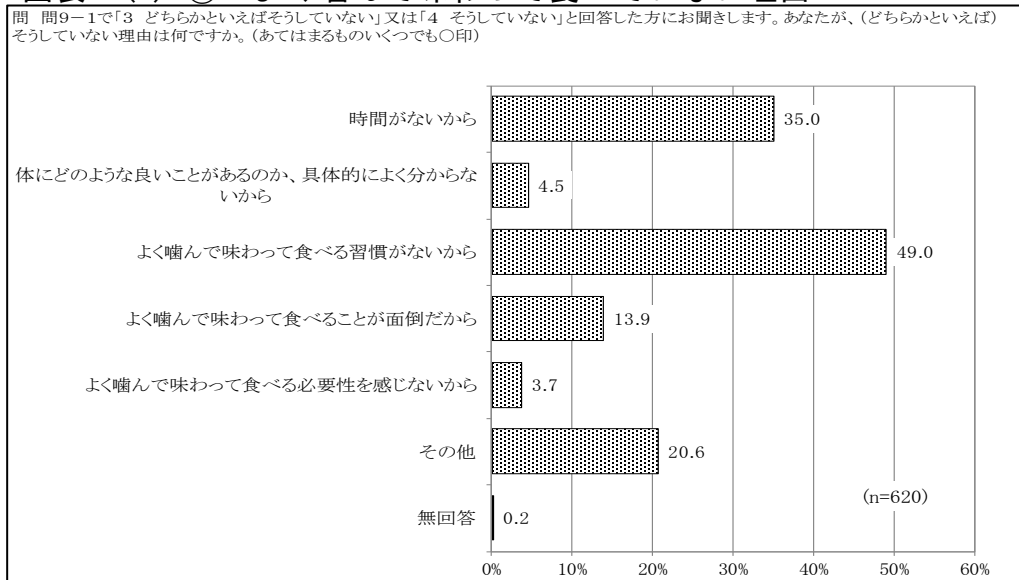
(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(5)-③ よく噛んで味わって食べる実践状況



(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(5)-④ よく噛んで味わって食べていない理由



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。

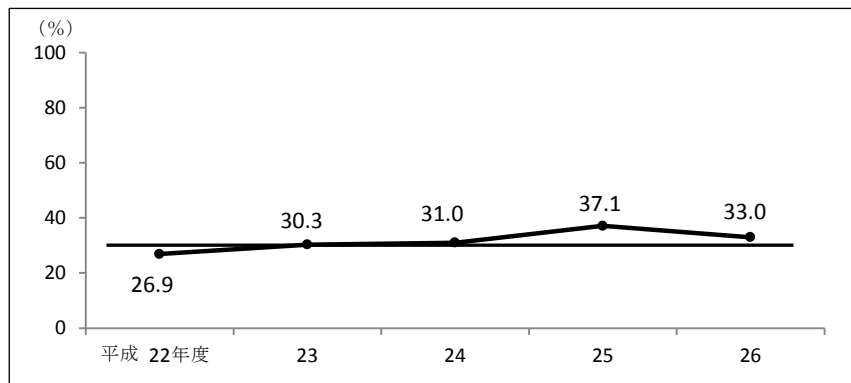
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

(6) 農林漁業体験

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである農林漁業体験を経験した国民の割合(目標値は30%以上)は、図表2-(6)-①のとおり、平成26年度に33.0%となっている。

図表2-(6)-① 農林漁業体験を経験した国民の割合



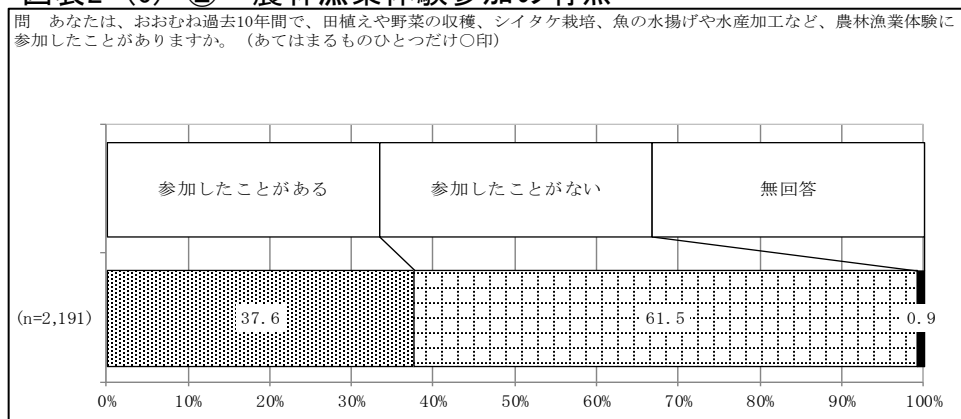
- (注) 1 測定値の把握は、「食生活及び農林漁業体験食育に関する調査」(農林水産省)による。
 2 測定値は、本人又はその家族の中で農林漁業体験に参加したことがあると回答した者の割合である。

イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、農林漁業体験に参加したことがある人の割合は37.6%となっている。(図表2-(6)-②参照)。ただし、農林漁業体験に参加したきっかけの約4割が「農林漁家だから」という回答のため、生産者と消費者の交流の促進という趣旨からは、参加者に若干のずれがある可能性がある(図表2-(6)-③参照)。

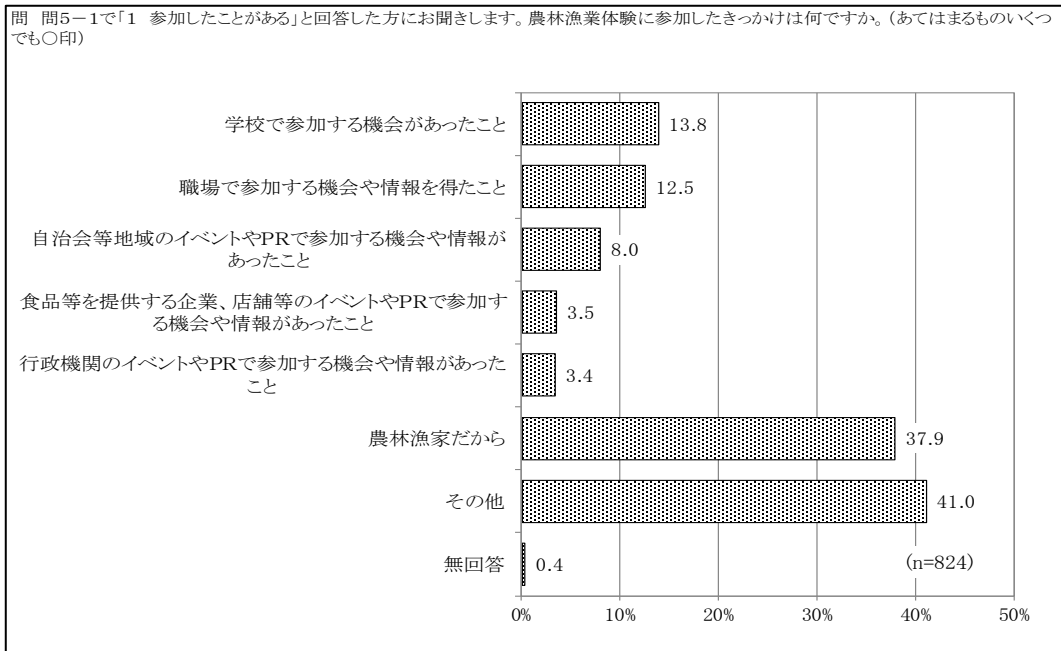
農林漁業体験に参加していない理由(複数回答)については、「参加する機会がこれまでなかったから」(71.6%)という回答が最も多くなっている(図表2-(6)-④参照)。

図表2-(6)-② 農林漁業体験参加の有無



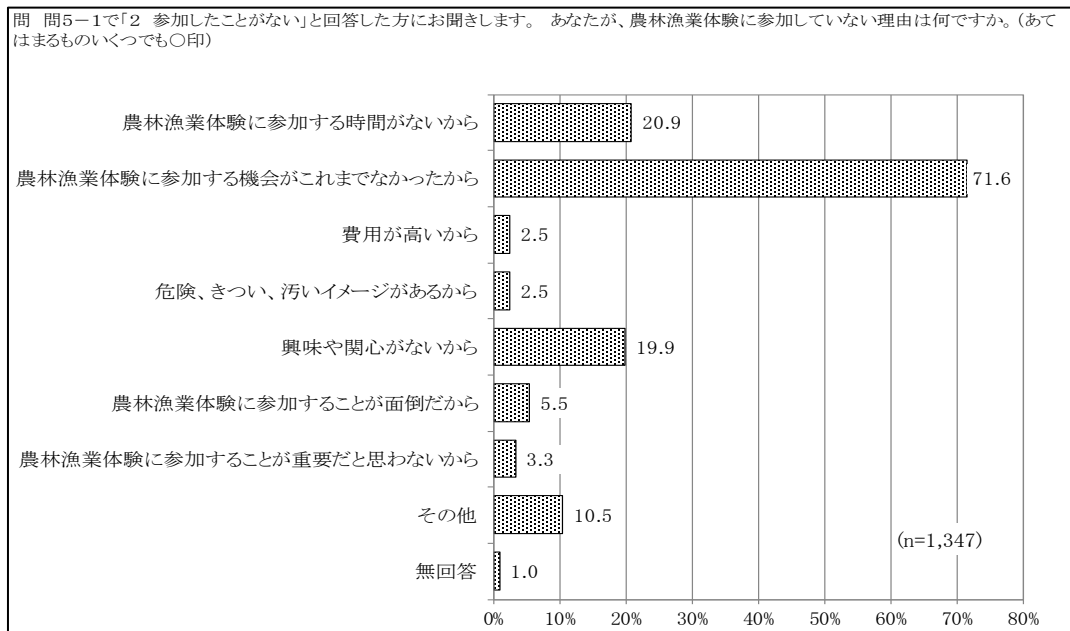
(注) 当省のアンケート調査結果による。

図表2-(6)-③ 農林漁業体験参加のきっかけ



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

図表2-(6)-④ 農林漁業体験に参加していない理由



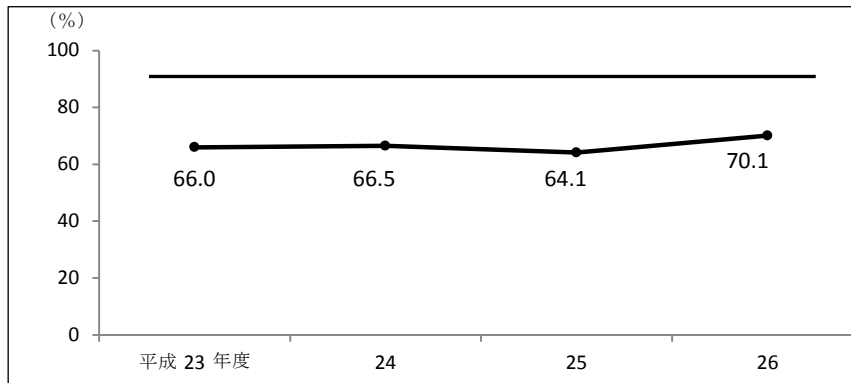
(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

(7) 食品の安全性に関する知識

ア 目標の達成状況

第2次基本計画の目標の達成状況を測定する指標の一つである食品の安全性に関する基礎的な知識を持っている国民の割合（目標値は90%以上）は、図表2-(7)-①のとおり、平成26年度に70.1%となっている。

図表2-(7)-① 食品の安全性に関する基礎的な知識を持っている国民の割合



- (注) 1 測定値は、「食育に関する意識調査」(内閣府)による。
 2 測定値は、食品の安全性に関する基礎的な知識(健康に影響を与えない食品の選択方法、調理法等)を持っていると思うかとの問いに対し、「十分にあると思う」又は「ある程度あると思う」と回答した者の合計である。
 3 平成 23 年度に調査手法の変更があったため、同年度の測定値から掲載した。

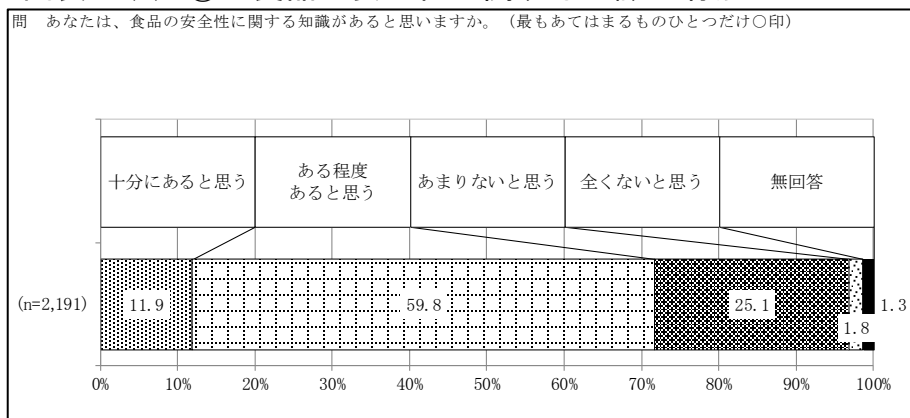
イ アンケート調査結果

当省のアンケート調査結果では、食品の安全性に関する知識について、「十分にあると思う」と「ある程度あると思う」と回答した人を合わせると71.7%であり、内閣府の調査とほぼ同様の結果となっている(図表2-(7)-②参照)。

食品の安全性に関する情報の入手先(複数回答)については、「新聞、テレビ、雑誌、インターネット等」(75.1%)という回答が最も多くなっている(図表2-(7)-③参照)。

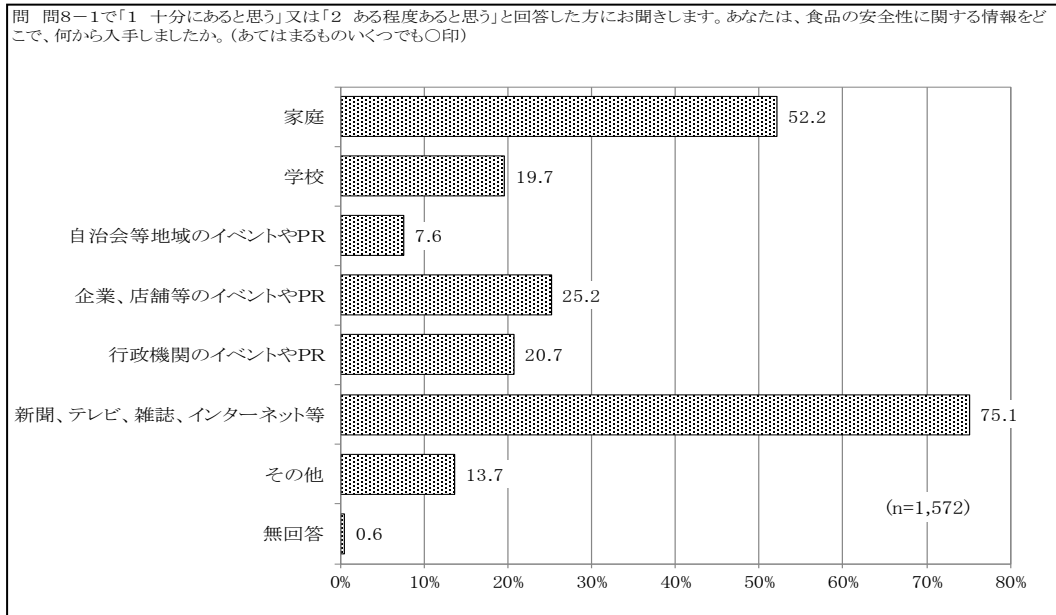
食品の安全性に関する知識が「あまりないと思う」又は「全くないと思う」と回答した人の約6割が、その理由を「情報が氾濫しており、どれが正しい情報か分からないから」と回答している(図表2-(7)-④参照)。

図表2-(7)-② 食品の安全性に関する知識の有無



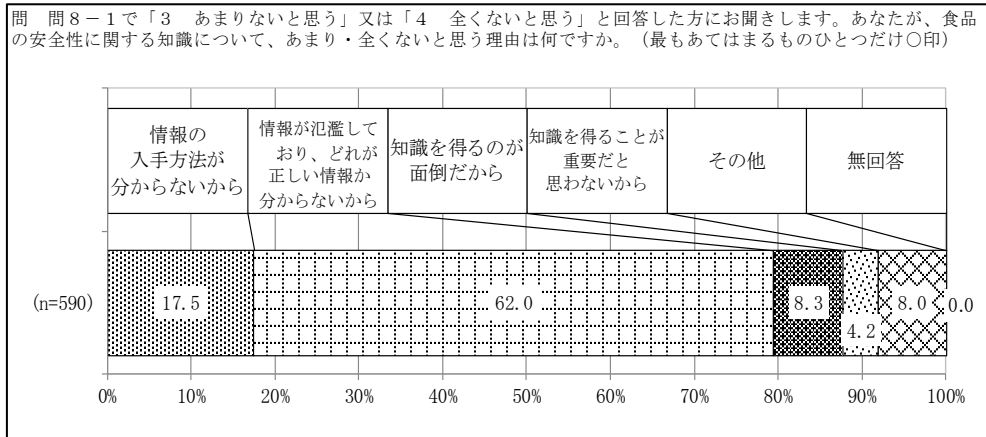
- (注) 1 当省のアンケート調査結果による。
 2 割合は、四捨五入したため合計が100にならない。

図表2-(7)-③ 食品の安全性に関する情報の入手先



(注) 1 当省のアンケート調査結果による。
2 複数回答のため、割合の合計は100にならない。

図表2-(7)-④ 食品の安全性に関する知識があまり・全くない理由



(注) 当省のアンケート調査結果による。

(8) 食育に関する目標の重要性を認識するようになったきっかけ (複数回答)

前述(1)から(5)の目標について、「重要」又は「どちらかといえば重要」と回答した者に、その重要性を認識するようになったきっかけを聞いたところ、図表2-(8)のとおり、「家庭での教育」及び「新聞、テレビ、雑誌、インターネット等」と回答する人の割合が多かった。

図表2-(8) 目標の重要性を認識するようになったきっかけ（複数回答）

設問（複数回答）	共食	朝食欠食		栄養バ ランス	メタボリック シンドローム	食べ方 に関心
		20歳代 男性	30歳代 男性			
1 家庭での教育	73.8	31.6	33.5	59.0	22.1	63.6
2 学校での教育	21.7	23.7	15.9	31.7	10.0	33.4
3 自治会等地域でのイベントやPR	2.6	0.9	1.2	4.5	2.4	3.7
4 食品等を提供する企業、店舗等のイベントやPR	3.2	5.3	4.1	11.1	7.7	8.1
5 行政機関のイベントやPR（広報誌、パンフレット、ホームページ等）	7.7	2.6	2.4	9.7	12.0	10.3
6 新聞、テレビ、雑誌、インターネット等	32.9	22.8	25.9	52.4	57.3	57.6
7 健康診断や特定健康診査（メタボリックシンドロームのみの質問）	—	—	—	—	56.4	—
8 その他	1.1	13.2	15.3	17.8	14.1	15.6

(注)1 当省のアンケート調査の結果による。

2 食育関連指標は、以下の略である。

「共食」：朝食又は夕食を家族と一緒に食べる「共食」の回数の増加（週10回以上）

「朝食欠食」：朝食を欠食する国民の割合の減少（20歳代男性及び30歳代男性15%以下）

「栄養バランス」：栄養バランス等に配慮した食生活を送っている国民の割合の増加（60%以上）

「メタボリックシンドローム」：内臓脂肪症候群（メタボリックシンドローム）の予防や改善のための適切な食事、運動等を継続的に実践している国民の割合の増加（50%以上）

「食べ方に関心」：よく噛んで味わって食べるなどの食べ方に関心のある国民の割合の増加（80%以上）